

個体の数量化と抽象化

リュウベックのヘンリクスによる個体化論から出発して

石田隆太(日本学術振興会/慶應義塾大学)

個体化の原理が何であるのかといういわゆる個体化の問題に関して、西洋中世には様々な見解が存在していた。或るスコラ哲学者による整理に基づくなら、七通りに見解を分類することができる。

- ①「本性」(*natura*)に対して「担い手」(*suppositum*)を付加する個体化の原理は「否定性」(*negatio*)であるという見解。
- ②「本性」に対して「担い手」を付加する個体化の原理は「究極づけられた現実性」(*actualitas ultimata*)である限りでの「存在」(*esse*)であるという見解。これは「存在」と「本質」(*essentia*)の実在的な区別を前提とする見解である。
- ③事物の「このもの性」(*haecceitas*)が個体化の原理であるという見解。
- ④個体化の原理は「質料」(*materia*)であるという見解。一般にアリストテレスに由来する見解とされる。
- ⑤個体化の原理は「形相」(*forma*)であるという見解。
- ⑥個体化の原理は「全本質」(*tota essentia*)であるという見解。主として質料と形相が現実的に合一されたものが「全本質」の内実として想定されている。
- ⑦外在的であるだけではなくて内在的な個体化の原理が「量」(*quantitas*)であるという見解。実際には「指定された質料」(*materia signata*)を個体化の原理とする人々が想定されており、トマス・アクィナスはこの見解の代表例として想定されることが多い。

ここで、以上の整理を提示しているスコラ哲学者について述べることにしよう。彼の名前はリュウベックのヘンリクスであり、14世紀前半に活躍したドミニコ会士で一般に「トマス学派」(*die Thomistenschule*)に属するとされている^{*1}。彼はいくつかの任意討論集を残したことで知られており、その内の第1任意討論第19問題が「質料は個体化の原理であるのか否か」(*Utrum materia sit principium individuationis*)を主題としている^{*2}。彼によれば、上記の①から③は端的に偽であるが、④から⑦は互いに相反しているように見えても実はいずれも真なる仕方理解することができ相互に還元可能である。

リュウベックのヘンリクスによる個体化論に関するほとんど唯一の先行研究を発表したヴァーツラフ・ブチホフスキーは、個体化の問題に対するヘンリクスの解決法を或る種の折衷主義的なものと解釈する。そのような折衷主義が生じた理由としては三つの理由が挙げられている。第一には、アリストテレス的な質料形相論を前提として個体化の問題を定式化することに伴う様々な困難が存在することである。第二には、ヘンリクスが依拠している権威としてのトマス・アクィナスによる諸著作が個体化の問題に関する多様な解釈を許してしまっているということである。そして第三には、パリ司教エティエンヌ・タンピエによる1277年の禁令以降、懐疑主義的および批判的な思想潮流の影響が14世紀のスコラ哲学において支配的だという状況があったことである^{*3}。この第三の論点に関してはステファン・シュヴィエザフスキーによる「プログラムに従った折衷主義」という概念が念頭に置かれている。すなわち、タンピエの禁令以降のスコラ哲学者たちはいわ

ば意図的に折衷主義を採用しているという概念のことである^{*4}。

以上の三つの理由に依拠してヘンリクスの見解が折衷主義的であるとする解釈は、特にヘンリクスの置かれている歴史的な状況に依拠した解釈である。たしかに個体化の問題に対してどう答えるのかという観点から見た場合、ヘンリクスの答え方は折衷主義的だと言えるかもしれない。少なくとも④から⑦という四通りの見解をある意味ですべて認めてしまっているからである。ただし、仮にヘンリクスが個体化の問題に関して本当に折衷主義者であるとしたら、この問題に対して解答する中で用いられている論理そのものにも曖昧な点があるのかどうかを見極める必要がある。それゆえわれわれが改めて検証したいのは、ヘンリクスがどのような個体概念および個体化概念に依拠して論を展開しているのかということ、そして、ヘンリクスの個体化論とその有力な源泉の一つであるトマスの個体化論との共通点や相異点がどこにあるのかどうかということである。

ヘンリクスによれば、実体の類における個体は二通りの観点から考察できる。一つは、実体の類における最下位のものであり、他のあらゆる述語はそれに述定されるが自らはいかなるものにも述定されないという個体概念であり、「ヒュポスタシス」(*hypostasis*)、「第一実体」(*substantia prima*)などと言い換えられている。もう一つは、個体という言い方でよりふさわしいものとして、多数のものの部分であること、つまりは数的に区別されたもののことであり、多であることを原因する量を本質的に含意する個体概念である。さらにヘンリクスは、そもそも本質的に複数のものになりえないものに関しては個体化があるというよりは「単数性」(*singularitas*)があると言う。

トマスにおいても、ヘンリクスが言う二通りの個体概念は確認できる。しかしさらに言えば、本発表でもその一端が示されることになるが、トマスの場合には個体概念の超越概念的な使用が見られるし、本質的に複数のものになりえないものに関しても個体化という概念が適用されている。

ヘンリクスの個体概念や個体化概念がどのようなものであるのかということ、そしてヘンリクスとトマスの個体化論を比較することで見てくる両者の共通点と相異点を考慮することで、個体をめぐる哲学的な思考の方向性に関して有意義な相異を窺うことができる。それは敢えて言うなら、個体の領域を狭くすることで個体を数的に区別されたものに限定しようとする方向性と、個体の領域を広く取ることで個体性という概念が抽象化されていく方向性の二つである。この二つの方向性がそれぞれ何を意味するのかを最終的には考えることにしたい。

^{*1} Cf. STURLESE, L., "Heinrich von Lübeck III," in *Die deutsche Literatur des Mittelalters Verfasserlexikon*, hrsg. von W. STAMMLER et al., Bd. 3, Berlin 1981, 781–85.

^{*2} HEINRICH VON LÜBECK, *Quodlibet primum*, hrsg. von M. PERRONE, Hamburg 2009, 187–96.

^{*3} BUCICHOWSKI, W., "Le principe d'individuation das la question de Henri de Lubeck „Utrum materia sit principium individuationis”," *Mediaevalia Philosophia Polonorum* 21 (1975): 89–113 (sp. 103).

^{*4} SWIEŻAWSKI, S., "Filozofia w Europie XV wieku," in *Filozofia polska XV wieku*, pod red. R. PALACZA, Warszawa 1972, 435–90 (sp. 482–85).